

## 夏の日のこと

わたしは、ごみ収集車しゅうじゅうしゃに乗って、家庭から出るごみを回収する仕事をしている。毎日、ごみを出した人の心を感じながら仕事をしている。たとえば「割れたガラスです。」ごみぶくろにこんなメッセージが付いていることがある。そのごみを出した人の優しさやささが伝わってきて心がなごむ。でも、ときには、ガラスと知らずにつかんで手を切ったり、竹のくしが手にささったり……。だから、真夏でも、手を保護する厚い手ぶくろあつをしながらの回収作業となる。そんな残念なことにもすっかり慣れてしまったある夏の日のことだった。

連日の猛暑もうしょで、ごみのおいはますますきつくなる。おれるゴム手ぶくろは外せない。つらい仕事である。照りつける太陽の中、汗あせだくで、ごみぶくろを収集車に入れるときのことだった。何とも重かったふくろが突然に破れ、中から大量の液体えきたいに近いみそが飛び散った。わたしは、頭からそのみそ

をかぶってしまった。かみの毛から顔にみそがたれ、目に入る。シャツもズボンもみそだらけになった。

「くっ、ふぎけるなよ。」

あまりのことに思わずそう大声で怒鳴りながら、もう片方でつかんでいたごみぶくろを地面にたたきつけた。赤ちゃんをだいて立っていたお母さんが、びっくりしてわたしを見ていた。それでも、どうしてよいかわからず、いかりにふるえながらただ立ちすくんだ。

「おい。」

後ろから低い声で呼ばれふり向くと、がんこで有名な職人のおやじさんがこわい顔で近寄ってきた。(最悪だ。) そう思った。

「うちへ、こい。」

おやじさんは、たしかにそう言ったが、わたしはよく意味が分からなかった。



とまどうわたしに、力強く手まねきをしている。言われるがままについていった。おやじさんは、みそだらけのわたしを自分の家へあげ、ふろ場へ案内した。わたしは、

「すみません……。」

と言いながらシャワーを借りた。ふろのとびらを開けると、目の前にきれいなシャツとズボンが置いてあった。仕事仲間が待っているので、あわてて、収集車にもどろうとすると、

「おいつ、にいちやん、だれが出したごみだか分からないが、本当に悪かったな。おれが、みんなによく言っておくからよ。」

おやじさんは、そう言いながら真新しい白いタオルをわたしの首にかけてくれた。

収集車にもどると仕事仲間とさっきのお母さんがそうじをして、みそを水で流し終わったところだった。

「すみませんでした。」

わたしは、お母さんにあやまって、頭を下げた。お母さんは、

「いいえ、大変だったわね。これからも、よろしくお願いしますね。」

そういって、よく冷えたお茶をくれた。

「ありがとうございます。」

おやじさんとお母さんに、わたしは、心からの笑顔でそう言っていた。

収集車は走り出した。

いつもはうるさく感じるせみの鳴き声が、今日は心地よく後ろに流れていく。

いつまでも忘れることのできない夏の日のこと。

